

地球は、太陽を中心として楕円軌道を描きながら、自転しつつ公転している。この青い星は、現在まで約45億年ものあいだ、公転し続けている。その表層では、この期間様々な変化を辿って来たのだと歴史は教える。現在、我々の目の前に見える風景は、その変遷の結果として姿を現す。この星が、地球以外の惑星に比べて異質であると言われるゆえんは、水を湛えていることである。結果、生命の出現を可能とし、我々人類のような、客観的認識力を持つ生き物を生み出すこととなった。が、その能力が、図や文字や数字を生み出すことで記録される歴史を積み上げ、複雑なコミュニケーションを可能とした。時間の概念も、この能力によって形作られ、我々が同じ空間を共有することが出来る法則となった。つまり、一日を24時間、一年を365日と言うように。これは、数値化することで、我々の内的世界に外部との境界線を引くことが出来るという事である。それまでは、時間は可変であり、外部の影響によって変化するものとして、受け取り方によって自由に変えることが出来るものであったろう。数字は、都市の発生と同時に、メソポタミア地方のシュメールで発明された。ピタゴラスは、宇宙を人間の主観ではなく、数字の法則によって理解できるとした。数字を駆使することで、自然の法則を考え、それを彼等教団の教義の一部としたが、外部に知らされることはなかった。教団が散りじりとなった後、後の時代にその考えが伝えられる。しかし、その手法が一般化され進展されるには、ガリレオやニュートンの時代を待たなければならない。観察と、仮説を証明する実験。天動説から地動説に変わる時代、彼らの発見による法則は、太陽系と地球を中心とする考えであった。ここでは重力、運動、光などが、どのような法則を持つかが思考された。20世紀に入り、アインシュタインの登場が、太陽系だけに限定されない、宇宙にも及ぶ空間を説明する原理が考え出される。つまり時間は相対的なものであり、場によって見え方が違ってくるというものであり、質量とエネルギーは等価なものとして新たな法則が見出されたという事である。

地球上の、我々の目の前に広がる世界、今日では大陸はマントルの対流によって移動し、陸上の土は微生物による分解や、植物などの体積により生まれ、植物や、動物は空気の層によって生かされている事など、あらゆる分野の研究によって理解可能となっている。太陽からの距離、ハビタブルゾーンに位置する地球は、地軸が傾いているために季節が生まれ、咲き誇る花々や、真っ白い雪に覆われた風景など、我々は、その変化を楽しむ事が出来る。夜空には、現在では見えにくくなっているとは言え、天の川銀河や星々を見ることが出来る。ここで、太陽の光の下、光は光波の波長の長さ、物質にあたる時に吸収される波と反射される波によって物質の色の見え方が変わるという味気ない理解ではなく、光が速度を持ち、時間が総合的にあらゆるものを結び付け、色彩を持っているということを知られるのである。“空”の同義語として。

地球は太陽系に属する惑星であり、その中心にある太陽は、天の川銀河に数千億あるといわれる恒星の一つで、核融合によるエネルギーで輝いている。天の川銀河は、約幅10万光年、厚さ2万光年の大きさであり、その渦巻き型の中心では、星々が密集し輝き、約2億光年をかけて回転していると言われている。地球は誕生してから、45億年と言われているから、太陽の周りを45億回公転していることになる。もし我々の属する天の川銀河を俯瞰してみるとするならば、地球が45億回まわっているあいだ、この銀河はゆっくりと22,5回回転していることになる。地球の寿命は、太陽が赤色巨星となり膨張し、最後に白色矮星として終わる50億年の後、赤色巨星に飲み込まれて消える。それは、銀河の回転が、後25回ほどに過ぎない。ここで言いたいのは、ゆっくりと回転している巨大な銀河の片隅で、地球は太陽を中心に、ものすごい速さで回転していると思えることである。そして地球が、ゆっくりと回転している銀河の中で、巨大な赤色巨星とともに消えていく姿であり、その時間の短さである。銀河では、数千億個の恒星がそのようにして、明滅しては消え、さらにチリとなったガスから新たな星が誕生することを繰り返す。だから、この巨大な空間においては、地球の時間は、はかないものと思える。地球上の人間にとって時間を感じる感覚は、空間把握の持ち方によるのだと知らされる。

“私の今回の作品の表現は、何気なくほっておかれた木片に目を向け、それが持つ時間性と、それを見た私が感じる時間性を組み合わせたものとなっている。その時間性を色彩として組み合わせ、時間の背後にある風景を強調する。さらにその作品を、特定の画廊空間に設置することで、余白のある空間を作る。それは、作品の内側に現わされる主張だけではなく、外側の空間も作品の一部であり、あることとないことを考えてもらうための方法でもある。一瞬で過ぎ去る時間、そのことを画廊の外にまで広げて、広大な空間に結びつけることである。”